ミて Mi'Te

◆詩と批評◆第 164 号◆

2023 年◆秋◆季刊

◆ ◆

川瀬慈　Kawase Itsushi

メリンダ・スミス　Melinda Smith

菜畑みちる　Nabata Michiru

笠間直穂子　Kasama Naoko

樋口良澄　Higuchi Yoshizumi

イナン・オネル　Inan Oener

ジェフリー・アングルス　Jeffrey Angles

新井高子　Arai Takako

◆ ◆

・本・

〈詩集〉川瀬慈『叡智の鳥』Tombac (1760 円)

ジェフリー・アングルス『わたしの日付変更線』思潮社 (2420 円)

新井高子『ペットと織機』未知谷 (2200 円)

〈翻訳〉Mutsuo Takahashi, tr. Jeffrey Angles『Only Yesterday』Canarium Books($17)　**新刊！**

Osaki Sayaka, tr. Jeffrey Angles『Noisy Animal』Vagabond Press (¥2500)　**新刊！**

Shigeru Kayama, tr. Jeffrey Angles『Godzilla and Godzilla Raids Again』University of Minnesota Press ($19.95)　**新刊！**

Itsushi Kawase, tr. Jeffrey Johnson『Mischief of the Gods』Awai Books ($33.99)　**新刊！**

C・F・ラミュ著、笠間直穂子訳『詩人の訪れ　他三篇』幻戯書房 (3630 円)

イナン・オネル訳『「ナーズム・オラトリオ」テキスト全訳』非売品

〈評論〉樋口良澄『唐十郎論 ――逆襲する言葉と身体』未知谷 (2200 円)

新井高子『唐十郎のせりふ ――二〇〇〇年代戯曲をひらく』幻戯書房 (3080 円)

・お知らせ 1・

川瀬慈・講演会「世界を異化することばの力 ――アフリカの吟遊詩人　アズマリ」

司会・笠間直穂子、10 月 7 日(土) 15:30~17:00、國學院大 6 号館 6B13 教室

予約不要、入場無料。詳細は國學院大《多言語・多文化の交流と共生》プロジェクトの HP で。

・2・

12 月 2 日(土) 14:00~、イベント「言葉を移す、文化を映す／詩人の翻訳」(対面&遠隔)

於・國學院大学、司会・笠間直穂子、出演・森山恵、菊地利奈、J.アングルス(Zoom)、新井高子

無料。教室やオンライン配信等の詳細は、同上の國學院大 HP で追って！

・3・

12 月 18 日(月) 19:00~、吉増剛造&マリリア&鈴木余位&樋口良澄のイベント「歌うと語ると」

於・南青山 MANDALA、¥2800 (学生 ¥1500) +1drink、予約は 03-5474-0411

初回は 9 月 12 日に行われました。詳細は、樋口の X (@eEQADIYhRafFI6r)を。

・4・

瀬戸内国際芸術祭サポーター・こえび隊主催「学ぶ！ 楽しむ！ 大島サマースクール」で、

子ども向けの詩ワークショップ講師を新井がつとめました (8/4~6、於・高松市大島、青松園)。

・5・

第 76 回福島県文学賞、詩部門の審査委員の一人を新井がつとめます。発表は 10 月。

・6・

『ミて』新号は、ウェブサイトの「お知らせ」欄から pdf でも読めます (半年限定)。

http://www.mi-te-press.net/

【後記】川瀬さんに詩の寄稿、スミスさん、菜畑さんに翻訳成果の掲載をお願いしました。

編集: 新井高子 ／ 発行所: ミて・プレス ／ 発行日: 2023 年 9 月 30 日(土)

寄付を随時受け付けております。郵便局口座: 10090-74894051　名称)ミテノカイ

E-mail:　mite@ace.ocn.ne.jp

「ソレデハミナサマ、ゴキゲンヨウ。」

帰路

川瀬慈

ある朝起きたら海洋放出されたはずの高レベル放射性廃棄物がフジヤマのてっぺんからどっと噴き出し大地を覆いつくし故郷は汚染され私の国は驚くほどあっというまに産業廃棄物のガラクタとなり戦争があれよあれよというまにはじまりはじまり住む場所を追われ乳飲み子を抱え渡り鳥を追いかけるようにとりあえず南へ南へとむかったがあちこちで食べ物飲み物あらゆる資源の奪い合い小競り合いは止むことを知らず山を越え谷を越え川を越え同じく逃げ惑う人々と助け合い励ましあい奪いあい罵りあいこんな緊急時にどさくさにまぎれて儲けようとするやつらの存在に心底驚き全財産を狡猾なブローカーにつぎこみなんとか私と子供のぶんのボートのチケットを購入し海の向こうの彼の地をめざしたのだけどボートは古くておんぼろで船体に亀裂が入りみるみる浸水がはじまり私はどす黒くタールのように光る大海原に皆とともに乳飲み子とともに投げ出され底へ底へと引きずられるように沈み飲まれ揺られ乳飲み子は恐怖のあまり人間であることあきらめタールの海に巨大な鯰に姿を変えてすみつくことを選択し私をさっそく飲み込もうと口を大きく開いたけれど命からがら逃げうせ到着したコンクリートの岸には有刺鉄線と高い壁壁壁そして兵士たちが銃銃銃を構えこちらにむけて発砲をはじめたので私は干からび萎れそうになりながらやもりになって壁をよじ登りトラックの荷台にのせられビニールシートをかぶせられ家畜となって売られ買われ売られ買われ聞いたことのない言葉を話す土地の人々の氷のまなざしが私の皮膚につきささりそのまなざしの刃は心臓にまで達しようとしたがなんとかその異国で職を得て工場の機械の一部となって昼夜働き人々のお前の家に帰れと叫ぶ声は大きなチャントになりチャントは大きなうずとなったが帰る国もお金もないし工場を飛び出し異国の路上で物乞いをやりながら重い皮膚病をわずらうヨブという名の物乞いが少しだけパンをわけてくれたので飢えをしのぎ夜露となって人々の心の中に投影される希望をつたって故郷に帰ろうとしたが誰の心の中も荒涼な砂漠で希望はみいだせず人々が夜みる夢の底の底をつたって帰ろうとしたが人々の夢の中には灰や煤の堆積物しかなくとほうにくれていたところ夜が明けてきたので朝日に向かって歌い語られるホメロスの叙事詩のなかにもぐりこんで世界のはてのはてまで匍匐前進してまた次の宇宙が誕生するまで息をひそめてちょっとだけ待つことにいたします。

蛾を噛むような

メリンダ・スミス（Melinda Smith）　　訳　菜畑みちる&新井高子

きみはドアを閉めて、
そのことを置き去りにしていった、
孵化する前の卵のように。
きみの背中に声をかけたけど
それは濃厚で、口からしゅっと出ていって、
焦茶色になっていく　ソレは
ふさふさした羽で　ふるふるしていて
わたしは　そのきみへのことばが
重苦しくなってきて、歯に引っかけながら
過ごして、冗談だったり　あだ名だったり　枕投げのときの約束だったり
窓ガラスを　割っちゃったこと
だったり　ステージ４じゃなく
まだ　ステージ３なんだという希望
だったり　高一のとき　万引きできみが捕まったことを
どうしてわたしが知っているのか　とか
1979年に　きみから奪って隠したミニカーの場所を
どうしてまだしっかり覚えているか
とか　内視鏡手術でなんでもわかるよね、
最近は。

ことばに詰まって
そして　堰を切って溢れてくるのは
わたしというすべて
は、的外れなおしゃべりのかたまりみたいなもので
だから、こう考えてしまう、
山火事のあとで
黒ずんだ芽吹きが
見当外れなところから出てきて、梢じゃなく、胴吹きしてしまった
みたいな、その黒焦げのしろものが　なんでこうなったか
という原因だけを　なんどもなんども教えて、ほかのことは
なんにもできなくて、
でも　わたしは　きみに言えない、
きみに　そんなことは　そのような
ことは。
咳払いすると
わたしの舌の下から　溢れ出る
蛾の粉やそのばらばらが。

＊キャンベラ開催の国際詩祭(2017 年)、東京開催の豪日詩人の催し(2018 年)でごいっしょしたメリンダ・スミスさんが来日。2023 年 9 月 30 日、早稲田大学で、メリンダさん、菊地利奈さん、川口晴美さんの協働で、翻訳ワークショップが開催された(運営は藤井一乃さん、運営協力は松永美穂さん)。秋空の下、歌人の川野里子さん、詩人のカニエ・ナハさん、佐峰存さんなどが爽やかに参加したが、わたしのお隣りは、詩や絵をかく菜畑みちるさん。英語力の乏しさを彼女に補ってもらいながら、メリンダさんの詩「mothful」(詩集『Man-handled』(Recent Work Press, 2020)所収)を共訳した。悲しいときさえ、人のあたまは、瑣末さを引きずりながら走馬灯のように動きつづける。そんな原詩の感じが日本語でも出せるといいなと試みた。(新井)

倦怠期の取扱説明書

ジェフリー・アングルス

とげとげしい葉を広げるイラクサと
朽ちかけた臭いリンゴより

気になるのは　空を隠す樫の梢
晩夏が過ぎても茂り続ける枝が

折れて　影とともに落下する
家を埋めようとしているように

その下　私たちは住みつづける
その後　という中途半端な時代

ついこの間まで　林の底で
咲き乱れた花はもう光らない

その褪せた色が翌日の汚れた
紙吹雪にしか見えない　そうだ

時間がのろのろ進む　近いうちに
霜がおりてくる　決意を持って

辛抱づよく　私たちの熱かった体を
白いマントでゆっくりと包む

その時　もっと良い日々の残骸の中で
生き残る方法を教えてくれるのか

虚しさと寂しさと痛みにもかかわらず
私たちはそれを受ける　すべてが

霜を受けるように　私たちも
拳を広げて　すべてを受け入れる

雀

新井高子

あなたさまの頬や眼球のおくの脂に、なり申そうチィ
あるかなきかのその垂れ眼に、奢りの光かりを呉れてやろうチィ、
ってねえ。

鳥もちだろうが、かご罠だろうが、トッ捕まィて、食べるとぎ、食べられるとぎ。雀たちゃァ、
騒ぐでしょう。ヒッ摑みゃァ、肘鉄みだいに両翼バタ付かし、指かんで、訴ッたえるでしょう。
まさしく、何かバ言うとるでしょう。
絞めかねるがですよ。その首、けらッと捻れなかったがですよ。手の中で、
楊枝のような足が折れ、尾羽が折れ、うす茶の和毛があたりサ散って。だでも、小ィさな生きモ
ンほど、向こうッ気の強うがですよ。泣きゃしませんから、雀ッコは、チィッとも涙ァこぼし
ませんから、
絞り出そうと指あてりゃァ、
くぐッ、くぐッと、脈打って、目ン玉が。そうして、ばっきら、見返して、
見咎めて。
己れに見切りバ付けしゃったっきゃあ。柔こィ喉を打ち震わし、
まさしく啖呵バ切り出すがんしょう。

野暮ッたィその受け口へ、飛び入ろうチィ
見ン事に雀らィて、
つんつるてんになり申そうチィ
焼きゃァがれ!、七輪で、
せせッこましい胃袋で、酢っぺえ液に湯浴みすりゃァ、
白金色のあみの酸になり申そうチィ
白頭の南無あみだサンになり遂げようチィ
白雪みだいな、名も、脂肪さまにオン化けようチィ
あなたさまの眼の底で、
かんらら、かんらら、身ィ燃やし、身ィ灯し
揚々と、

思い上がりバお授けようチィ
奢りの光かり、お散じようチィ
痴鈍げた手振り、お見せしようチィ
チィらら、チィらら、舞おうチや。チィらら、チィらら、舞おうチや。
百年たって、天下の輪廻がでんぐり返りゃア、
こっちが口ひげ、そっちが口ばし

言い立てとるのア、わだァし、ですよ。
右手に一羽、ヒッ掴み、その身のごとくふれ回り、その身のごとくふる舞って、
舞って、祝いで、その鼻先へツン出して、
捻って、いのちバ毟ってから
ひげ顔さまの
　　お口汚しに。

喰わさィねかったがですよ、その言いぶんを聞かんうちァ、聞かさんうちァ。慰めねばならんがですよ、雀ッコも、お口さまも、そのお嬢さまも。
啄んだ虫どもの弔いですから
榎の梢で、いま、
雀らが歌うておるのも、

そうげな河原が、
そうげな裸足が、
わだァしですよ。

わだァしの呪詛ですよ。

(Waterside 2)

【トルコ近現代詩の翻訳94】

詩人オヌル・ジャイマズの一篇の詩

訳　イナン・オネル

詩人オヌル・ジャイマズは一九七七年イスタンブール生まれ。イスタンブール在住。今号のために二〇一九年発行詩集「Dünya Evi」掲載の長編詩「Gümüş Dua」（銀製の祈り）を訳す。ちなみにDünya Evi とは嫁いだ先の家を意味する。婚家というべきか。直訳は「世界の家」、つまり人は結婚して初めて「世界」に出会うところに基づくのであろう。「世間の家」とするべきかと思ったが、ふと窮屈になって、やめた。

銀製の祈り

黒を通ってすべて
子供のようなこの黒を
夜がはじまると火事の通り
バリケードもあるが銀製の

時を満たす汗ばんだ胸で
黒い馬を通って誰だと伺う
誰も知らない、その囁くのは誰だ
雪の降る下を走りすぎて破裂しそうな痛みで
死ぬ前にハンケチをたたむ
銀において汗かく葉っぱに感じる
絶え間なく目を失う賭博にて

ここにいる、ボドルムに
象牙がわたしの手を握り、蓄音機の花
雲が落ちると日々が転ぶ
子供の時に誰かからか借りた時計を思い出す
青い門を、月面のラジオ派を
宇宙は海だった、わたしが小さかった頃
歯軋りさせる窓、そして誰だ、誰だ、その
鍵が銀製の

ある日、母が
迷子になるなよと言った　街路へ出掛けるとき
誰も見つからない　あの日から
わたしは失う　わたしの美しい口を　賭博で
わたしの顔にルネッサンスの色の落ちた天使たち
ざらざらの黄色いガラスで刺さる　私の手に　陽
しかし何故かここに、ボドルムにロードス島のバラ
独りぼっちの漁師のブルーがわたしをどこかへ連れていく
装飾が施されているアンフォラに千年前から

ひとつの彫刻に命を得るイルカ
バリケードがあるぞ、しっかりしろ、バリケードが

その盲人と腕を組む毎日　ガードマンが
夢を見るのかしらと考える
タクシーを降りる女の太ももに顔を寄せつける
家の内側へ奥へと街が大きくなる
汗ばみ汗をかきながら旗と寒冷紗
洗濯紐に干さない礼拝用の敷物
ストーブパイプがもとより中毒している　土間を洗う日
家々、内側へと大きくなる、引出しへ
ブラジャーやブレスレットや汗ばんだ貨幣が
びっしりつめられた月光の入らない引出しへ

立てつけられた銃が吠える　絶えず街の中で
水へ垂れ下がって広がるぶらぶらの髪の柳
あなたから頂くこの太陽のある蜜を
ヒヤシンスのブルーに沈んだ草原のもと
いちぶ袋小路に出入りする　夢の中で
クラクスズで祖父の墓へ上る坂道
父とカラキョイの倒れた道の石造のパン工房
ヒマワリが散る　まっすぐにトラキアへ
まったく終わらない　そしてなんとも美しく伸びる線たち
なんともよく効く　その線たち　厳しい傷口に

コナックの党事務所はサンセベリアを飾る
ギリシャ軍が引き下がっている　隊長が軍に命令を下す
詩のワークショップを再開できる道端で
いちども開催しなかったがそれでもいつか　詩　いつも再び
スープ屋の窓から国旗を垂らしていた、わたしは覚えている
葡萄酒に赤い魔法を　ケシを加えていた、いかに忘れようか
国旗を国旗たらしめるのは何であったのか、失っている
わたしは目を　顔を　顔でさえ　賭博で　絶えず

口髭がある、どう、少しはお金も、小切手や借用書
血にまみれていたようだトランクが、髪の毛が櫛で正してあった
アイロンをかけたワイシャツ、そしてアンカラのニューハーフのチラシ
わたしは身分証明書を失う　アンカラはいつもそうである
時が暮れるそこで　絶えず　見てみれば
官庁街で

たとえば断食明けの時である　エユップで
外装にひびが入った家に老齢の男たち
そして何故か止め処なく神を替える
砂漠が来る　断食前に　口元のデーツ
エユップの外装にひびの入ったときに男たち
しかし酷い家で句読点のない詩を作る

かれらは飛べない　嗚呼　アフメット・ハムディ氏よ　一行
　一行において

黒を通ってなにもかも
通りながら黒くなる仕方なく
すべての内側に火事がある　だからこそ
ミルクと混ざって火傷の匂いがする
乳房の丘に住む亡霊たち
その完璧な穴に
分針ではなく時針を
奥へ突っ込む

なにもかも互いを探す　空虚の中で
コラム記事が燃える　封印されていない選挙箱
為替の十字架にはためく骸骨たち
教会に小さな汚い絨毯があるでしょう
いちぶ男たちがいるでしょう　時折　教会に　亡霊たち
そういうことだとわたしが言う　そしてヘンデルが燃える

斜めの発見を始める　わたしは　そのときに
何ができるだろう　楽譜の紙が燃えれば
ボドルムにいる　下方を雲が通る
バイオリンの音で流れる　なにもかも
きっと降りるよ　わたしたちも高みから
いつかわたしたちも地に降りる　恋人よ
アルサンジャックかエトリック農園か　気にするな
きっと勝つよ　わたしたちがきっと　全部十すんだ洗濯物を
宝玉である　ぶらさがる死人において紐が
紐において死人もぶらさがりえる
紐で死人も
しかしそれでも金歯でグルジア人の労働者の女たち
朝昼晩　車両の黒くなって焼けた列車で

過ぎ去って　虚無の国を
地に降りて見てみたら地がそこにないだろう
行かないよ　誰も　恋人よ　戦争がある
容易ではない　街中が癌にまみれている
井戸から飛び出て大ネズミたちが
邸宅を作っている　その川辺に
武器の用意はできているか　吾子よ　このお殿様たちのため
　に

死んでいるのにもかかわらずその光がわたしたちに届く島々
ビリヤードの用意はできているか　たとえば　ポーカーの
あなたは薄着だがわたしは寒くない　恋人よ
二人であとまた十年の用意はできているか　たとえば
傷付けることがなく互いに　恋人よ　恋愛において　死にお
　いて
わたしのあの大好きな古代ギリシャ語の単語に

赤い王冠の室内花に
干すよ　すべてを　用意はできているか　恋人よ
子供が識字に挑む紐に

民謡合唱団があるでしょう　覚えているか
あなたは行けなかったでしょう　キャップがなかったから
　卒業式
用意はできているか　燃やすのに　あの汚れたリボンのコー
　ティングを
下卑た許可証や報告書を、免税証明を
バリケードの用意はできているか　と言ってるんだ　バリケ
　ードの
炎の石が降ってくるぞ　用意はできているか
銀行が震えながらうごめく時間に
そしてピンクのカーテンのパッサージュの肉団子屋に
心臓が爆裂しかねないほどの坂道を登る
分かっているでしょう　用意はできているか

仕事が大変難しく、期待が大きい
一冊のロシア小説から　どこもかしこも　照らされている
説教壇を通ってくる　なにもかも　だが何だろう
小道に挟まれた古い墓たち
一九五六年の冬に投函された一枚の絵ハガキ
そして来るでしょう　来ない理由はないでしょう
なぜなら　恋人よ　姉妹である　水仙とチュベローズ

ひとつの銀製の祈りである　これは　あなたに捧げる
プラーザで読まれる　戸棚に仕舞われる
恋人よ　終わったのか　膿と工事
終わったのか　指の折れたシフトのホイッスル
給料のカードの用意はできているか　キャッシュアドバンス
　のために
経費明細書ってあるでしょう　わかるでしょう
明細書があれば　人間はどこかへ行ける

ストーリーの中で武器があれば　恋人よ　必ず発砲する
そして　信じよ　きっとすべてを干すのだ
死人を紐で
死人も紐へ
変化してわたしたちの首を絞める

わたしたちも死ぬ　もちろん　恋人よ
しかし　心配するな　それだって一緒に！

もちろんだとも　一緒に

二〇一八年　春夏
ボドルム・イスタンブール

きれいでいられるわけがない

笠間　直穂子

ガロンヌ河の支流にあたる、小さいけれど緑の水を深くたたえた川辺の遊歩道を、アリスさんと、小学生の息子さんと、三人で歩いた。五年前の夏、わたしが翻訳を担当したことのある作家、マリー・ンディアイの、フランス南西部にある自宅に何日か寄せてもらったとき、ちょうどマリーさんが脚本を担当する映画の打ち合わせのため、監督のアリス・ディオップ、編集のアムリタ・ダヴィッドも滞在していて、知り合ったのだ。そのときは、どんな映画なのか、まったくわからなかった。彼女たちにも、まだよく掴めていなかったかもしれない。

アリスさんと川辺を歩きながら、いろんなことを話した。先入見なく多様な本や映画に接し、忌憚なく評する、彼女の誠実さはきわだっていた。あまり笑わないのだけど、いやな感じが全然しない。ドキュメンタリー映画のことや、現代文学のことを話し、ヒップホップの話題にもなった。バロジ（一五九号参照）はすばらしいよね、と意見が一致したあと、彼女は、ラ・リュムールもいいよ、と教えてくれた。

「リュムール」（rumeur）の語義は、「噂」、そして「ざわめき、（不平の）どよめき」。一九九〇年代後半から活動している四人組で、フランスのアフリカ系移民二世が置かれた状況を、強い言葉で告発してきた。「自分たちにとってラップは、それまで言葉をもたなかった層にあたえられた発言の場」。ルーツから切り離された文化のなかに育ち、しかもその文化において自分が劣等の存在であるというメッセージを受けとらされつづける、その苦悩と怒りを社会に向けて語った最初のラッパー世代に属する。

グループの核をなすアメとエクエのふたりのうち、アメはフランス南部ペルピニャン出身、ルーツはアルジェリア。エクエは、パリ郊外ヴァル＝ドワーズ県出身、ルーツはトーゴ。前者は北アフリカの「アラブ」、後者は西アフリカの「ブラック」とレッテルを貼られる出自だが、彼らは自分たちがともに「アフリカ系」であることを重視し、同じ問題に直面する兄弟としての連帯・共闘を目指す立場を採る。

二〇〇二年、これまで何百人にものぼる移民ルーツの若者が警察によって殺害され、しかも殺害者は罪に問われずにきた、と雑誌記事で指摘したアメに対し、当時の内務大臣ニコラ・サルコジは、国家警察に対する名誉毀損だとして告訴した。八年におよぶ裁判を経て、アメは無罪を勝ちとる。

アメはメディア社会学の専門研究課程修了証（博士課程一年目に取得する学位）をもつ。エクエは法学博士で、パリ政治学院の修士号も取得している。ふたりともおそろしく犀利で、弁が立つ。といっても、べらべらと表層を滑る話し方ではない。真剣に、きちんと言葉にしようとする。彼らも、誠実なひとたちだ、と思う。

十年ほど前から、ラ・リュムールは、音楽だけでなく、本や映画も手がけ、ジャンルを超えたインディペンデントな政治的文化活動を展開している。近年は映画制作に注力していた彼らが今年、とうとう、十一年ぶりとなるアルバムを発表した。そのタイトル曲、「きれいでいられるわけがない」を取りあげてみたい。

とはいえ、彼らの詞は、ものすごく密度が高い。俗語から難解な単語まで駆使して、韻を踏み、同音を繰り返しつつずらし、掛詞で意味を重ね、慣用句を換骨奪胎するといった具合で、翻訳で伝えるのがひときわ難しいテクストだ。日本語ラップに蓄積された押韻の素養も、わたしには足りない。それでも、雰囲気くらいは伝わるだろう。第一節の最初と最後だけを、今回は見ていく。冒頭はこんな感じだ。

意図的　線引き　五線譜さながら
俺らの鎖の合間、沈黙の合間、痛む神経の合
　間
俺らの猿じみた戦争の合間、ジャッカル対ヒ
　ヒ
吠えろ、おどかせ、おまえは悲しみを守る番
　人
見張る門と門の合間、腕章つけて
赤いシェシア帽の兵士よろしく、命令一つ、
　鞭一振りで動く

「線引き」と訳したのは、c'est réglé で、「あらかじめ決められた」と「線を引いた」の意味があり、両方を掛けた「五線譜のように線を引かれている＝細かく決められている」という成句がある。そこから出発して、鎖につながれた「俺ら」の集合が、物言わぬ、暴力的な、国家に奉仕させるべき野蛮な存在としてあらかじめ「意図的」に規定されている現実が、脚韻によって召喚された言葉（音楽 musique／神経 névralgiques／ヒヒ babouins／悲しみ chagrin／赤 rouge／動く bouge）を通じて、徐々に焙り出されていく。「シェシア帽」は、北アフリカの兵士がかぶる縁なし帽のこと。

こんなふうに、閉塞的な状況と反逆への欲求、それを抑えこもうとする警察の暴力を描いたのち、第一節は次のように締めくくられる。

ヘモグロビンと嗚咽、どこかゴレ島の気配
記念すべきことは皆無、檻は金塗りでさえない
危機的な自発的愚昧と
街灯が照らすプロファイリングと、毒を放つ
空気との裏側
塀の合間、柵の合間、こうむる刑罰の合間
惨事の合間、ここだけの話、きれいでいられる
るわけがない

「嗚咽」は sanglot なので、つづりの上で血 sang とつながるし、ヘモグロビン hémoglobine の glo の音ともつながり、語呂のいい「ヘモグロビンとサングロ」で、血の涙、といったイメージが浮かぶ。「ゴレ島」は、西アフリカ・セネガルにある奴隷貿易の出港地となった島。いまは世界遺産に登録され、観光地と化したが、こうした「負の遺産」のメモリアルに力を入れて贖罪のポーズをとりつつ、植民地主義の帰結としてある進行中の問題に向き合わない欺瞞こそ、ラ・リュムールが批判の対象とするものだ（日本は贖罪のポーズにすら至っていないことも、思わざるをえないけれど）。

「檻は金塗りでさえない」は、一見恵まれた条件のようで、実は被支配状態にあることを指して「金の檻」と呼ぶのを踏まえた言葉。「プロファイリング」は、いわゆるレイシャル・プロファイリング、つまり特定の肌の色の人物を狙うなどの人種差別的な職務質問を意味するものだろう。

「俺ら」が、行動を制限する仕掛けに囲まれ、追いこまれるさまが、冒頭からつづく「〜の合間」（entre）の反復に示され、それらは最後に「自分たちのあいだで＝ここだけの話」（entre nous）という表現に収斂した末、「どうやって身ぎれいでいられるんだ」（Comment rester propre ?）という反語に行きつく。そのようにつぶやかずにおれない現状は、制度として張りめぐらされた抑圧のせいにほかならない、というわけだ。

アメが警察による移民系若者の殺害に言及してから二十一年目の今年六月、アルジェリア系の十七歳、ナエル・Mが、交通違反の取締中に警官に射殺された。こんなことがいつまで繰り返されるのか。怒りの炎がフランス中に燃えあがった。

翌月、アリス・ディオップ監督、マリー・ンディアイとアムリタ・ダヴィッドの脚本による映画『サントメール』が日本公開され、アリスさんが封切りに合わせて来日した。長いあいだ映画に描かれてきたアフリカ系の人間に対するステレオタイプを、静かに無効化する、鮮やかな作品だ。トークショーで、アリスさんは、ナエルの殺害に怒っていた。あらゆる層の人びとが手を取り合えるという希望を、いまは完全に失っている、と言い、司会者がいくら明るい言葉を引き出そうとしても、いいえ、少なくともいまは希望を見出せません、と譲らない。

ラ・リュムールも、アリス・ディオップも、真摯に怒ることを知っているのだ。ごまかさず、まっすぐに、何度でも。

Comment rester propre ?
La Rumeur

La Rumeur, *Comment rester propre ?*, Da Buzz, 2023.

Interview de Ekoué et Hamé du groupe La Rumeur (Tout le monde en parle, 07/06/2003), INA https://www.ina.fr/ina-eclaire-actu/video/i08324881/interview-de-ekoue-et-hame-du-groupe-la-rumeur

『血は立ったまま眠っている』の衝撃

唐十郎と寺山修司3

樋口良澄

寺山と唐の仕事上の出会いは、前回書いた唐の最初の戯曲よりも前、寺山が脚本を書き、和田勉が演出したNHKテレビドラマ『一匹』（一九六三年一月放映）にさかのぼる。小品ではあるが、このシナリオは、自選した『寺山修司の戯曲』（思潮社　全四巻　一九六九～七一）に、数あるシナリオの中から選ばれ掲載されているから、寺山にとって重要な作品だったのだろう。

主人公の少年の飼っていた牛「太郎」が、ある日突然いなくなり、どうやら東京に行ったらしいと大人たちに聞いてわかる。実は大人たちは、牛が食肉にされることを知っているのだが、明言しない。少年は様々な困難の末、東京の食肉倉庫のような場所にたどり着き、冷蔵され、皮をはがされて吊り下げられた肉塊の中で太郎を探す。やがて、太郎の運命を少年が気づいたことが示され、物語は終わる（『寺山修司の戯曲』第三巻に掲載されているシナリオと放映版とは異なっている）。

飼っていた牛が売られていく悲しみを歌ったジョーン・バエズの「ドナドナ」（六一）を連想したくなる物語だが、冒頭に「答えはいっぱいあるのに　質問はたったひとつしかできなかった　少年にとってそれは大人になることを意味していた」という文字が入るところが寺山らしい。「質問」とは寺山が好んだ方法で、街でいきなり質問をするテレビ・ドキュメンタリー『あなたは……』（一九六六）など初期の作品でしばしば登場している。

こんな哲学的な言葉が冒頭に入るドラマなど、今では絶対作れないだろう。寺山の言葉はさておき、この映像を初めて見たとき私が強く惹かれたのは、太郎がいないことに気づき探す少年の必死の表情、そして皮をはがれた巨大な牛の胴体が何体も天井から吊り下げられた中を探す少年の無言の絶望だった。モノクロの乾いた映像が、余計に少年の感情に思い入れることを喚起するのである。和田勉の演出は見事で、寺山も『寺山修司の戯曲』の作品ノートで「和田勉を高く評価している」とわざわざ付記している。

『寺山修司の戯曲』は当初四巻だったが、私が「現代詩手帖」を編集し、寺山の連載を担当していた中で、新たに巻を追加し、決定版自選戯曲全集としたいという申し入れを受けた。一九八三年のこと。体調が思わしくなく、演劇から離れるという話は秘書の田中未知さんから聞いていた。企画の申し入れを聞いたとき、ついにこのような整理をし始めたのだと理解し、厳粛な気持ちになった。月刊誌を編集していたため、流石にこの大部の企画まで手が回らず、実際の作業は、当時寺山の出版関係のスタッフで、現在は小説家として活躍している湯本香樹実と思潮社社長の小田久郎が進めることとなった。湯本が編集部に持参した、原稿用紙に書かれた寺山の自筆構成案の堂々とした文字を今でも覚えている。全八巻の、一見して考え抜かれたことがわかる、完成された構成だった。

『一匹』に、唐は屠夫の役として少しだけ登場する。六三年一月の放映だから、制作は六二年、唐が大学を卒業し、福田善之の「青年芸術劇場」に入団している時代だ。二人の対談「劇的空間を語る」（「劇場」八号一九七六年三月）によれば、出会いの頃、寺山と唐は話があい、「気があって一緒に何かやろうかなんて話していた」（寺山）。『一匹』への寺山からの出演依頼はこのようにして生まれた。

唐は「そのとき僕は一介の役者で、寺山さんの『血は立ったまま……』の続編があったら、あわよくば出さしてもらおう位の気持ちで会いにいったようなことがある」と語っているが、この言葉は、大学時代の六一年にすでに小説やシナリオを書いていたのが明らかになった現在、言葉通りに受け取るわけにはいかない。役者としての唐だけでなく、作家としての唐も、寺山に共振したに違いない。

『血は立ったまま眠っている』は一九六〇年七月初演。安保条約自然承認による闘争敗北は、六月一五日。「デモ隊が国会に乱入したとき、私たちは最後の舞台稽古に入っていた。世をあげて政治的季節に酔っているとき、政治を通さぬもう一つの「救済」と「解放」のための抵抗を説くことは、きわめて至難のことであった」と寺山は、同じ第三巻の「作品ノート」に書いている。若いテロリストたちの変革への夢を取り巻く青春群像を、演劇のセオリーを破る詩的な言葉で描く、挑

発的な作品だ。寺山はこのとき二三歳。私はこの作品を異なる演出家によって何度か見たことがあるが、描かれた「抵抗」は今も輝いていると感じる。

『血は立ったまま眠っている』についてはやがて詳しく触れるつもりだが、今回は寺山と唐の出会いに沿って話を進めよう。この作品は新しい才能の出現として当時話題になったようで、明治大学実験劇場の唐の仲間たちも見に行っている。演出は浅利慶太で、劇団四季の制作である。ちなみに浅利は、中曽根康弘のブレーンになったりして自民党政治と密着し、輸入ミュージカルで成功した実業家のように見られているが、晩年まで一切の叙勲を辞退し、戦争を描いた創作ミュージカル三部作を発表・演出するなどの面では、一貫した姿勢を示した存在であることに注意すべきである。

劇団四季は浅利が大学の仲間とともに一九五三年に設立した。今でこそ四季といえばミュージカルだが、設立当時はストレート・プレイが中心だった。唐のいた学生劇団、明治大学実験劇場が設立されたのも五四年、当時隆盛だった新劇に対して、若い演劇人が自分たちの演劇を模索する時代が始まったのだ。一九五八年、浅利は安保条約に反対する「若い日本の会」創設に参加する。メンバーは石原慎太郎、谷川俊太郎、羽仁進、大江健三郎、黛敏郎らなど多彩だが、寺山もいた。この流れの中で浅利は戯曲を寺山に依頼したのだが、六十年代末の寺山、唐らの前衛演劇運動の原点は、この時の『血は立ったまま……』にあると私は考えている。(若い日本の会には福田義之もいて、大学を卒業して福田の劇団の研究生となった唐が寺山と出会ったのは、この会の関係だったということを唐から直接聞いたことがある。しかし、これは未確認である)

唐は初演を見にはいかなかった。しかし、「文學界」七月号に掲載された戯曲を読み、後の講演では「本当に張り倒されたような、非常に鮮烈な印象を受け」たと語っている(講演「詩人の兄貴たち　土方巽と寺山修司」二〇一〇年十一月三日　「ミて」一五七号掲載)。この「文學界」では、「演劇の新しい波」という特集が組まれ、大江や石原、安部公房と並んで浅利も「新しい演劇の方向」という文章を寄せている。

この時、唐はすでに文章を書いていた。小説と戯曲を書いて実験劇場の先輩の布勢博一に託すのは翌六一年。「張り倒された」のは、役者、演劇人としての唐だけでなく、作家としての唐でもあったのではないだろうか。この時、唐は真に寺山と出会ったのだ。

唐の小説は、大江健三郎に影響を受けたと思われる、政治的な状況を踏まえた作品である。一方で戯曲の方は、無為にすごす人物の内面をひたすら描く。どちらの方向に行くか、迷っていたに違いない。結局彼が選んだのは戯曲の方向で、閉塞した世界を描くことによって、現実の根源をとらえようとする道だった。静止した内閉世界を描く初期の戯曲三部作は、その方向を掘り下げたものと言えるだろう(詳しくは唐の小説と戯曲を私が解説した「文藝」二〇一八年冬号をみてください)。この選択に寺山の存在が関わっていたかもしれないと思うのは、二人の関係にこだわりすぎだろうか。唐にとって寺山の存在は、「このようにあり得ること」を教えてくれると同時に「あり得ないこと」も感じ取らせたに違いない。実験劇場で政治的劇をやり続けてきたが、自分のやるべきことはこれではないということを、寺山を鏡のようにして感じ取ったのではないだろうか。

六十年代初め、演劇、文学、美術、音楽など、若者たちの表現の世界では身体、言語において革新的な試みが続けられていた。寺山も唐もその渦の中にあった。ただ、寺山には、十代の頃から続けてきた俳句・短歌などの言葉があった。言葉は、彼にとって虚構と現実の間を軽々と越境し、音や映像と絡みあえる、自由な力だった。それを現実の中で展開しようとしたとき、「演劇」となった、と私には見える。もちろん既成の演劇とは異なる世界だ。

一方、この時代の唐は、新しい演劇を模索してはいたが、役者としての自分の肉体を根拠として全てを発想しようとしていた。「特権的肉体論」につながる肉体と観念や言葉を結びつける思考は、まだ始まっていない。先に引用した対談で寺山は、自分は「頭を使ってからだを働かす」タイプだったが、唐は「からだを使って頭を働かす」存在として見えて「新鮮だった」と語っている。言葉において先行した寺山に、肉体で向き合ったのが唐だったのではないだろうか。二人の方向は違っていたが、変革への志は共有できたのである。

【東北おんばに聞く③】

斎藤陽子さんの大地

新井高子

斎藤陽子さん（昭和一三（一九三八）年生まれ）

出会いは二〇一六年六月のこと。書籍『東北おんば訳　石川啄木のうた』（未來社、二〇一七年）にやがてはまとまっていく土地ことば訳のための連続催し（全九回）が、終盤にさしかかった第八回目だった。それまでは仮設住宅集会室で行っていたが、復興住宅等への引っ越しによってその居住者が減ってきたこと、地域のことば好きのみなさんにも企画が広まってきたことから、総合福祉センターに会場を移しての初回だった。

陽子さんは、まるで豪風のように現れた。たたずまいに迫力があった。さらに、気仙弁の深い洞察力に圧倒的なものを感じた。すでに何度か書いているのだが、いや、何度でも書いて世に知らしめなければならないと思っているのだが、彼女がまず教えてくれたのは東北弁の濁音の、まさしく「奥義」であった。

その日、訳のためにとり上げた啄木短歌のなかに「何か一つ／大いなる悪事しておいて／知らぬ顔してゐたき気持かな」があった。いつもと同じ調子でわたしは一語ずつ、「気仙弁では？」と会場のみなさんに投げかけた。そしてその歌中の語「一つ」に対して、わりあい若手のおんばから、「ひとっつ」という声が上がり、わたしはそのまま板書した。すると、陽子さんは、腹の底から湧いたような声で、それは「ひとづ」だべ」。「大いなる悪事」をさす「一つ」、大きくて重い「一つ」なのだから、軽い響きの「ひとっつ」であるはずがはなく、重たく濁る「ひとづ」とするべし、と……。呆然のあまり棒立ちになったわたしが、板書の文字を書き換えるまで、「ひとづ、ひとづ、ひとづ、ひとづ……」と、自ら噛みしめるようにその語を繰り返した。

いや、驚くのが当然ではないか。東北弁に関する本をいくらかは読んできたつもりだったが、濁音の多さの意味を掘り下げる解説に出会ったことはなく、せいぜい、寒冷地なので口を大きく開けないから……のような非論理的な記述しかなかったのだから。

この洞察は、話し手がものごとの軽重や厚薄、深浅を見定め、その重み、厚み、深みを託す意味合いが、東北弁の濁音にはあるということだと思う。このように言い当てたのは、おそらくおんば企画が初めてではないか。前号掲載の金野孝子さんが、気仙弁の過去表現「～たった」が、古語の大過去「～き」と通じ合うことを看破したことと並んで、特筆すべき発見だったと思う。

わたしは唸った。単なる数字的表現の「一」だけでなく、重い「一」と軽い「一」がここにはあるのだから。そして、ほろほろと謎が解ける思いもした。例えば、気仙弁では「音」を、「おど」「おと」「おとっこ」などと様々に言い表す。それはただ「何となく」ではなかったのだ。例えば、鉄柱が倒れたような騒音であれば重い「おど」がふさわしく、小鈴のような可愛らしい音色なら「おとっこ」なのだ。無意識の自然な営みであっても、この会場のみなさんは、瞬時にそこまで捉えて声にしている。

言語というのは、そもそもは客観的で辞書的な記号システムであろうはずがなく、発話する人間とその感受性と声の響きが一体化したところで、随時、意味が立ち上がってくるのが本質であることを、この一件は示唆していたとも思う。

そして、それを説明できること、無意識の営みを意識化して伝えられることは、さらに貴重だ。これは只者ではないと感じ、催しが終わったあと、親しい中村祥子さんに「斎藤さんは、どういう方ですか」と尋ねた。すると、「大船渡の与謝野晶子だよ」。

越喜来の子

彼女は大船渡を代表する歌人、ことばの研鑽を重ねている人だった。対話を読めばわかる通り、子どもの頃から本好きで、新しい文化にも好奇心を向けてきた。鋭敏な感性をそうしてひたむきに育んできた。さらに一方では、大船渡市でも古風な田舎と言える、三陸町越喜来（おきらい）で生まれた。気仙弁に囲まれ、まみれて育った人。そういう人物が、自らの母語、土地ことばにその鋭敏さを向けたからこそ、方言学の研究者がいくら尋ねても見出せなかった達見が、おんば訳の会場に不意に現れたのだと思う。

（今回は不収録だが）対話後半で彼女が紹介する自作の震災短歌の一つに、土地ことばを入れて書いた「生ぎでだが生ぎでだよと抱きあいて震災後の人混みの中」がある。川辺に住む同級生にいくら電話しても連絡が取れず、もう……と諦めかけていたときに、スーパーで姿を見かけた。「生ぎでだが」と駆け寄ると、「生ぎでだよ」と向こうは答え、泣きながら抱き合ったという。この濁音、それを短歌に入れたことは、単なる訛りに留まらないだろう。震災の重み、年輪の厚み、再会の喜び、涙の熱さが宿った深い思いの表現。「生きてたか」では、全く響きが足りないのだ。実際、口にすれば、濁音は喉の奥で響く。東北弁のそれには、ものごとをからだの深みで捉える構えもあるのだと思う。

誌面の都合上、今回は全体の四分の一ほどしか掲載できないが、それだけでも、彼女の人生がいかに運命的か、伝わると思う。「大船渡の与謝野晶子」と評した中村さんの直感は正しい。鉄幹との恋愛を軸に、晶子が物語に値する人生を貫いたとすれば、陽子さんは親子を軸にそれを生きてきた。ゆえに濃い情感が歌心の核にあるのだろう。

さらに、親との生き別れを経たからこそ、漁業・農業の村、越喜来に育った彼女は、「越喜来の子」になったのではないだろうか。実際、大柄なほうだが、決まりきった父母関係の枠を越え、スケールの大きな栄養をその大地から吸い上げることができた人に感じる。豪農で、学問嫌いで、地域の長老でもあった祖父からうけた骨太な影響も大きく、彼女が語る村の暮らしの、なんと豪快で豊かなことか。父と離縁した母が、娘二人とともに戻った実家は、一七人家族だった。さらに、小作人も炊事の手伝いもいた。くわえて、その再婚によって女親とも別暮らしすることになるが、まるで南米で農場を経営する一家のような……。それによって、むしろ越喜来の「大地の子」として育まれたのではなかろうか。気仙弁理解の深さも、このことと繋がりがあるに違いない。

映画制作にとっては、ぜひとも入ってほしい人だった。二〇一八年六月一一日、監督の鈴木余位さんといっしょに、ご自宅に撮影にうかがうと、そこには催し会場での表情とはまた違った陽子さんがいた。肩の力が抜けている感じで、その文才も理解しなが

ら、長年連れ添っている夫君と仲良さそうに、ほっこり卓袱台を囲んでいた。

本稿の文字起こしについても、この夏、八五歳を迎えた彼女にいろいろとお世話になったが、詳しいお話、新しいお話を加えてうかがうことができたのは、さらなる喜びであった。

おんばに聞く

戦争と家族

斎藤　ここら映らねようにすっぺね(卓袱台の急須を片付けようとする)。

新井　でも、ときどきお茶を入れるところなども、(鈴木さんは)撮りたいんですって。

斎藤　そうすか、そうすか。

新井　いま、おいくつですか。

斎藤　七九歳一一カ月だ。もう少しで誕生日が来れば満八〇歳だどもね、おら、自分では八〇、八〇って言ってっから八〇だね。

新井　お生まれになったのは越喜来でしたか。

斎藤　気仙郡越喜来村字浦浜(現在は大船渡市三陸町越喜来)で、母の実家で生まれたのね。そのとき、昭和一三(一九三八)年の八月二〇日だから。ほら、昭和一二年から戦争だからね。戦争当時だったんだよ。

新井　戦争の真っ只中に生まれたんですね。

斎藤　そして父親が早稲田(大学)を終わって。昔は朝鮮と言っていたんだよね、朝鮮の女子大さね、助教授に行ぐって。

新井　お父さんは、教員として朝鮮半島に赴任して。

斎藤　それは昔のことだからね。「家族もみんな一緒にやる(行かせる)」って母親の実家では言ったんだども、嫁に行ったほうの綾里(三陸町綾里)のばあさんが、嫁までとられると労働力がなくなっから「やらィねァ(行かせられない)」って、やんねがったの。

新井　お母さんのご実家のほうは、みんなで行かせるのがいいと思ったけど、嫁ぎ先の姑さんに止められてしまった。

斎藤　で、「旅費から何からはこっちで持つから」って、うちの母の実家が言っても……。

新井　嫁入り先では浜の仕事などをやっていたんですか。

斎藤　うん、やっていた。製材所もやってたですね。

新井　では、そういう仕事をやる人がいなくなっちゃうというので。

斎藤　嫁はやられないと。嫁と子どもは置いていかれたわけだ。

そして、(父は)単身赴任して行った。

そのうちに、朝鮮さ行っているうちに、終戦になったんだね。

新井　昭和二〇(一九四五)年八月一五日を朝鮮半島で迎えて。

斎藤　そしたっけ、ほら、引き揚げ船さ乗るんだったんだけども、夫婦者を先にとか、子どもがある人を先にって、なかなか独身の、まず独り身のうちの父親は乗られなかったんだべね。

新井　優先順位があったんですね。

斎藤　してほら、女子大だから、大学生と偽装結婚みたいにして、まず、その船さ乗って引き揚げてきた。

新井　はい……。

斎藤　その女性は熊本県の人だったんだと。そして、家さ置いてくっぺ(置いてこよう)と思ったれば、家族が全滅していて、(父は)置いてくるのがかわいそうになった……。連れてきてみたらね。

新井　では、女子大生の家族はやっぱり空襲で。

斎藤　戦争で全滅して、そして置いてこられなくなったわけだ。

新井　ああ……。

斎藤　そしてまず、仕方ないから、この人の面倒を見ねばわがんねァから(面倒を見なければならないから)って、(父は)うちの母さば「おめ(お前)には家族もいるし、力になる人もいるから別れるべし」って言って。別れて、そしてその人と一緒になって……。父はまた(岩手)県内の高校の先生でいて、点々と歩いたね。

新井　では、戦争のために、斎藤さんはお父さんがいなくなってしまったというか……。

斎藤　そうそう。

新井　お父さんは、いっしょに引き揚げてきた自分の教え子と生活することになってしまったんですね。

斎藤　そうそう。

新井　そうなんですね。すると、お母さんにとってはお嫁に行ったおうちで、夫はいなくなったにもかかわらず……。

斎藤　ううん(いいえ)、出はったの(出て行ったの)。出はって、実家さ帰ったの。

新井　綾里から越喜来のもとのおうちへ戻られた。

斎藤　そしたら母の実家は大百姓の家でね。じいさんは、祖父は、一番大好きな人なの。長左衛門って(いう名前で)。長左衛門は長老だったから、人(使用人)も使ってて。それで、そこで育てられたの。妹も生まれてあったからね。妹と母と三人、そこにいて……。ずっと結婚するまでそこから離れたことねァの。越喜来生まれの越喜来育ち。だから、この言葉は、どこさ行っても直んねァのね。

---

1 越喜来は、主に漁業が盛んな海辺の村。大船渡市中心部の大船渡町や盛町からは距離があるが、現在は、三陸鉄道リアス線で気軽に訪ねられる。三陸駅下車。

2 父の名は沢口音助、母はアキノ。斎藤さんは沢口陽子として誕生。母アキノは大正六年生まれ。

3 日中戦争は一九三七(昭和一二)年開戦。真珠湾攻撃は一九四一(昭和一六)年のこと。

4 一九四〇(昭和一五)年ごろ、父は朝鮮へ赴任したそうだ。

5 越喜来の隣村。

6 一九四五年九月から引き揚げが始まるが、李炯喆「朝鮮における終戦と引揚げ」(『長崎県立大学国際社会学部研究紀要』第二号、二〇一七年)によると、軍人やその関係者の復員がまず優先され、その後、一般民間人が対象者になったという。その中でも順番は複雑にあったのだろう。

7 熊本には、一九四五年七月一〜二日、八月一〇日に熊本大空襲があった。日本本土空襲の一つと言われる。

8 引き揚げ後、父は新妻とともに郷里の岩手県に戻って、高校教諭として各校に赴任した。

9 祖父の名は、熊谷長左衛門。明治半ば頃の生まれ。その家には毎日、人が訪れ、地域の相談役だった。

新井　いやいや、その気仙弁が一番の宝物ですけど。では、子どものとき、お父さんがそういうわけで……、いろいろご苦労されたと思うんですけども。

斎藤　そのときはね、まず周りもみんな生活が同じような人たちだったし、その上に立っている長左衛門の下で育てられたから、大して生活には困らなかったのね。

新井　大きなお百姓さんで、余裕があったんですね。

斎藤　祖父がね、水産加工場もしていたし[10]。だから何も生活には困んねかったの。経済的にも困んねかったし。だから父さんがいなくて惨めだとも、困ったとも、貧乏だとも思わねァで暮らしたんだね。じいさんのおかげでね。で、そこで育ったのす。

子どもの頃の映画体験

新井　子ども時分の楽しかったこととか、思い出すのはどんなことでしょう?

斎藤　子どものときは、ほら何にも、店はねァんだからね、そこらにさ。まずおやつと言ったら干し柿とか、煎り豆とか、そんなものがおやつだったから、そうやって育ったどもね。みんな同じだったから、おらばり(自分ばかり)そんなだと思わねがったわけだ。

新井　むしろ平等だったんですね。当時の越喜来にはお店屋さんはなくて、だから、富がある人もあまりない人も、口に入れるのは地の物ばかりで。

斎藤　そしてあれだね。だんだん大きくなってきた頃には、中学生の頃には、映画が来るんだね。映画は小学校の体操場って、いまであれば体育館と言うども、そこでやるのね。ガラスが欠けていて寒いのに、そこさまず、映画見さ行くのが、何より楽しみだった。

新井　ほう、お店のない越喜来にも映画が来たんですね。

斎藤　来たの、来たの。

新井　すごいな。どういう映画が?

斎藤　昔、昔の菅原謙二だの若尾文子だのが出る『嵐の講道館』[11]という映画、すんごく良くって。それが良くてさ。三益愛子の『瞼の母』[12]とか、そういう映画が来てね。それを必ず見さ行ぎたくて。じいさんを騙して、お金をもらうまでね。「今日も約束したから行がねばわがんねァ(行くと約束したから、行かなければならない)」だのって言って、夜、見さ行ぐわけだ。そうするとね、学校ではね、未成年だから映画を見るのは禁止しているのね。

新井　恋愛ものとかもありますものね。

斎藤　そうそう。恋愛ものだから、そういうのを見たらダメなことになってんのに、見さ行ぐわけ。

新井　いいですねえ。

斎藤　そうすると、次の日に職員室さ呼ばれて。だれかチクっているんだね。

新井　先生たちは見に行った人を調べて……。

斎藤　職員室に引っ張られて、まずお説教されるわけだ。校長先生に怒られて。そんな思い出もあるしね。

新井　学校の木造の講堂みたいなところで見たんですよね。

斎藤　講堂さね、幕を張って、そして見るのす。板の間さ、ただずっと座って見るの。寒いのに我慢して見てね、帰ってきてから、今度はその映画の批評。妹といとこも一緒に暮らしていたからね。三人して「アレえがった(よかった)」「コレえがった」とかってね。言いながら、夜中までそんな話して、じいさんに「寝ろ、まず!」と怒られながら、それ語って(おしゃべりして)……。そういうあれ(思い出)もあったしね。

新井　一年に何回ぐらい、映画の会はあったんですか。

斎藤　毎月のように来たんだね。

新井　毎月ですか。

斎藤　そして、それがね、途中でね、映写機が切れるんす。フィルムが切れて。

新井　ほう、途中で切れる。

斎藤　うん。「盛(町場)さ取りさ行ったから、待ってろ」ってね。それをずーっと待ってて見たの。そういう映画を見たね。それが楽しみだったすね。

新井　内容だけでなく、見るという体験そのものが、わくわくと胸の震えることだったんですね。

子どもの頃の読書体験

斎藤　小学校の高学年ぐらいになってからかな。図書室っうのができて。窓があるところさ何冊かある、本がなんぼかある(程度)のが、図書室でね。その本をみんな読み尽くすぐらい本が好きだったの。

新井　はい。

斎藤　そうするとね、じいさんは、長左衛門はね。(朝鮮半島に行った)父親が、学校の先生になっていて勉強ばり(ばかり)して家の仕事をしない人だったから、そういうものは「かばねやみ」ってね。「かばね」というのは体のことね。(気仙弁では)怠け者のことを「かばねやみ」って言うんだどもね。「本読む者はかばねやみで、ろくな者はいねァから(本を読むのは怠け者で、ろくな人間がいないから)」ってね。おらが本読むの、大っ嫌いでね。

新井　何だか、耳が痛いです(笑)。

斎藤　うん。「本ばり読む者はろくな者ねァ」というのが、じいさんの頭に、こびりついていて……。

新井　私も長左衛門さんに叱られてる気がします(笑)。

斎藤　「読むな」と言うの。読んではだめだと。そんだからね、夕方になるとね、鉄砲風呂ってね、鉄砲のような形をした筒に薪をくべる風呂だったの。こういうふうにね(丸めたおしぼりを棒のように縦に立てて)。

10　いわし干や干鮑を作る水産加工場を営んでいた。

11　菅原賢一・若尾文子主演、枝川弘監督『嵐の講道館』は、じつは昭和三三(一九五八)年の制作なので、中学時代に見たというのは記憶違いで、高校卒業後ではないだろうか。だが、これを見て、菅原らの大ファンになったのだという。なお、昭和二八(一九五三)年に、森一成監督、長谷川一夫・山本富士子主演の『花の講道館』という作品があったが、そちらは見ていないという。

12　『瞼の母』は、昭和二七(一九五二)年、佐伯幸三監督、堀雄二・三益愛子主演。

新井　そういう煙突があったんですか。
斎藤　ううん(いいえ)。ここさ木を入れてやると、これ(筒)が熱くなってお湯が沸くのす。
新井　つまり、下から薪で炊くんじゃなくて。
斎藤　じゃなくて。鉄のこういう筒をね、ここ(風呂桶の中)さ立てて。風呂さ水を張っておくと、これ(鉄筒)が熱くなるために、お湯が沸くのす。
新井　なるほど。
斎藤　だから、これ(筒)さ薪をくべる。これが鉄砲風呂でね。どんどん火を燃やして。
新井　それが熱の棒になって、お湯を温めるわけですね。
斎藤　そして、火を燃すから、ここ(鉄筒の先端部分)が明るくなるわけ。これで本を読むのです。
新井　え?、お風呂に入りながら読むんですか。
斎藤　ううん、風呂の当番。火を切らさねァようにする当番があって、その薪の当番を、いつもおらが……。「おら、風呂の当番、すっから」と、この火でね。
新井　薪をくべる当番をかって出て、その明かりで……。
斎藤　本を読んでいたの。そのぐらい好きだった。
新井　ほう。どんな本を読んでいたんですか。
斎藤　いま思えばね、本なんてなかなか手に入んねァから、表紙もなくなって、何もなくなったような……[13]。いま思えば、あれはサトウハチロー[14]の本でねァかと思うんだどもね。そんな本とかさ……。
そして今度は寝るときはね、寝ていても電気をすぐ消されるから、懐中電灯を隠す。で、懐中電灯もって、布団かぶって、こうやって(布団の中で照らして)読むの。
新井　すごいですね。本当に文学少女だったのですね。
斎藤　本当に本、好きだったの。だから夕方は、もう懐中電灯を探して、こう隠して、そして布団さ入ってから、ずっといつまでもこうやって読んでいだったの。
新井　いやぁ、本のほうも、うれしがっていると思いますよ。
斎藤　大好きだったの。なんぼ読んだかわかんないの。
新井　素晴らしいです。

子どもの頃の昔話体験

新井　東北では語り部さんが昔話をするとよく言われているけれど、そういう感じで、子どものとき、どなたかからお話を耳で聞いたことはありましたか。
斎藤　それはまず、ばあさんが言うには[15]、ほら……。
「いま、山さつつじが真っ赤に咲いていんだども、昔は、真っ白いつつじだったんだど。こっち(越喜来)のアンコ(兄さん)と、こっち(吉浜)[16]のアンネ(姉さん)がいい仲になって、行ぎ合いさ行ぐべと思ったっけァ(会いに行こうと思ったれば)、行がれねくて。(アンコは)アンネを待っていても、(アンネは)なかなか行がねァから、(山を越えて会いに行こうとして)アンコが賊にやられて、血が散って、つつじが真っ赤になった。それから河内(かわづ。現在は「夏虫山」と呼ばれる)のつつじは、真っ赤になったんだど」とかって、そんな話を聞かせられて。
新井　ほう。山を越えて男が女に会いに行こうとしたらば……。
斎藤　賊に、悪者にやられて。
新井　山賊にやられて、切られちゃったので。
斎藤　血が散って。
新井　それで、あたりが真っ赤になって。
斎藤　で、いまでも、(越喜来にある)夏虫山のつつじは真っ赤なんだ、っつう話を聞かせられたね。そうしたものがあるのす[17]。
新井　いいですねえ。子どもの時にそういう不思議なお話を耳で聞いたのも、本好きの始まりでしょうか。
斎藤　本はまず、父親の血筋なんだろうなと思うのね。
新井　ああ、そうですよね。早稲田(大学)を卒業したお父さんの専門は何でしたか。
斎藤　文学部だったから国語だったんだべね。
新井　そうですか。お父さんと離れちゃったけれども[18]、心の中の種に、そういう文学好きな気持ちがね……。

(後略)

---

[13] 表紙や冒頭部はなく、途中から読むような感じで、作者名がわからないようなものもあったそうだ。
[14] サトウハチロー(一九〇三年(明治三六)年〜一九七三(昭和四八)年)。童謡の作詞、詩集の執筆などのほか、小説なども書いた。陽子さんは、その少年少女小説を読んだという。
[15] このお話を語ってくれたのは、祖母のキミエ(長左衛門の妻)。
[16] 夏虫山を隔てた隣村。
[17] 『三陸町史　五巻』(三陸町史編集委員会、一九八八年)や『三陸のむかしがたり　スカッパの詩』(三陸町老人クラブ連合会、一九九二年)は別の恋物語を所収。当地には恋を語る風土があったか。
[18] 父、音助との再会も数奇だった。両親の離婚後は会うことも音信もなかった。幼かった陽子さんはその顔を覚えてはおらず、父母の婚礼写真で姿を見ただけだった。音助の事情も周りの話で聞きかじるだけだった。だが、盛高校に入学した後、岩手県内の高校教諭の研修会が同校であったため、教員の父はそこへやって来た。家庭科クラブに属していた陽子さんは、その接待係をしていたところ、「沢口陽子」(旧姓は、父と同じ沢口)という名札を付けた女子生徒からお茶を給仕された音助は、「陽子か」と小さいけれども深い声で話しかけた。沢口というのは当地では珍しい姓なので、思い当たったのだろうと彼女は推し量る。そして会場を出ると、まだ会議中であったにも関わらず、音助は追いかけて来て、突然後ろから抱きしめ、「達者だったか、達者だったか」と言いながら泣いた。陽子さんは驚きのあまり、何も言えなかった。そして、音助が会場に戻っても、しばらく廊下に立ちすくんだまま、「あの人が父さんなんだ」と思ったという。
それ以降、ときどき会ったり手紙をやりとりしたり、交流が始まった。だが、祖父の長左衛門には秘密のままだった。母は気付いていたかもしれないが、勝三(再婚した夫)への気遣いもあって、一切口にしなかった。陽子さん宛の手紙は高校の住所に送られてきていた。当時は高級品だった折りたたみ傘が、送られてきたこともあった。チェック柄の薄いピンクの傘で、もったいなくて使えなかったという。
再会したとき、音助は四〇歳くらいだったが、膵臓癌のため四九歳で早逝した。亡くなるとき、娘に会いたがったが、母に止められて陽子さんは見舞いに行けなかった。あとで、親戚から聞いたところでは、病室のドアが開くたび、「陽子か」「陽子か」と父は枕から頭を上げたという。父からもらった手紙の束をいまも大事にしているという。